

臣民の道

教 育 局

(昭和五年三月二十二日)

序 言

皇國臣民の道は、國體に淵源し、天壤無窮の皇運を継承し奉るにある。それは抽象的規範にあらずして、歴史的にも日常實踐であり、國民のあらゆる生活活動すべてに、常に皇基を振起し奉るに歸するものである。

141
顧みれば明治維新以來、我が國は廣く知識を世界に求め、よく國運進展の根基に培つて來たのであるが、欧米文化の流入に伴ふ個人主義、自由主義、功利主義、唯物主義等の影響を受け、やがて是れが古來の國風と悖り、父祖傳來の美風を損なふ弊を見れ得た。滿洲事變發生し、更に支那事變起るに及んで、國民精神は次第に昂揚し、未だだが、是は未だ國民生活の全般に亘る國體の本義、皇國臣民としての自覺が徹底してゐるといふ難きものがある。もとより國體の尊嚴を知らず、美風が寧ろ觀念に止まり、生活の實際に表現せらるるものがある。殊に憂ふべきである。かくして、我が國民生活の全般に於て、根強く浸潤せしめ、欧米思想の弊を交除し、眞に皇運扶翼、國體體制を確立し、曠古の大業の完成を期する事は困難である。かくに於て、自我功利の思想を排し、國家奉仕の第一義とする皇國臣民の道を、昂揚實踐することこそ、當面の急務であるといはねばならぬ。(二―三頁)

元来歐洲諸國民、世界進出の冒險的興味、停戦にもな
 らず、主として飽くまで物質的欲望に導かれたものであ
 る。彼等は凡そ住民を殺戮し、或はこれを奴隷とし、その地を
 奪つて植民地とし、天賦の資源を擧げて本國に持ち帰り、
 或は交易によつて巨利を博した。されば彼等の侵略は世
 界の到處に於て、天に天に許さるゝ無稽を敢へし、
 悲惨事を繰り返したものである。アメリカ・インディアンは、如何
 なる取り扱ひを受けたか。アフリカの黒人は、如何。彼等は白人
 の奴隷として狩り集められ、アメリカ大陸に於て牛馬同様
 の勞役に従事せしめられたりである。この事は大東亞東洋禁
 國に於ける諸地より被征服過程の現状とに就いて見
 ても、思ふ年ばに過ぎるものがある。(四十五頁)

世界大戦は、獨逸の歴史の仇敵關係も與つては
 るが、主として英獨の制海權の爭奪、經濟制覇の
 闘争が其の原因となつて居る。而して、戦争の結果、戰敗
 國ドイツは徹底的重壓を加へられて滅亡の淵に逐はれ、
 英佛米の獨逸的世界支配が愈々強化せられた。民族
 自決の美名の下に弱小國家が戰後、歐洲地圖を接
 續に彩つたけれども、其等を要するに、英佛米の世界

制覇の保護たるの役割を擔ふものであった。所謂正義人道はただ假等の何匹の立場を正當化する手段に過ぎなかつたのである。(六頁)

近世初期以来西洋文明の基調をなした思想は、個人主義、自由主義、唯物主義、等である。この思想は弱肉強食の正當視、享樂的欲望の際限なき助長、高度物質生活の追求となり、植民地獲得及び貿易競争を愈々刺激し、これが因となり果となって世界を修羅道に陥れ、世界大戦といふ、自壊作用となす、現はれたいのである。此が大戦後假等の間から西洋文明没落の叫びが起つたのは當然のことといはねばならぬ。

英佛米等があらゆる手段方法を講じて現状維持に狂奔し、又、共產主義の如き徹底的なる唯物主義に立脚して階級闘争による社會革命を企圖する運動が熾烈となつた一方では、ナチス主義、ファシズム主義の勃興を見るに至つた。この獨伊に於ける新民主主義、全體主義の原理は、個人主義、自由主義の弊を打開し匡救せんといふものである。(七頁)

滿洲事變は久しく抑壓されて居る我が國家的生命の激發である。この事變を契機として、我が

國は列強環視の中は、進歩的世界の創造、新秩序
 建設、第一歩を踏出すべし。蓋し、此悠遠の途程
 なくば、學國の精神を顯現する、世界史的使命に
 基き、國家の生命、己む己と生ぬ發動である。(六
 頁)

かかる我が國運の隆々たる發展伸張は、東亞の天地を併
呑せんとする歐米諸國を——目く鼻く視せしめ、その対策
として彼等は、我國に對して或は經濟的壓迫を加へ、或は
政治的擾亂を企て、或は外交的孤立を策し、以つて我
が國力の伸張を挫かんとした。此ことは同時に東亞を——
その自主性を喪失せしめ、永遠に彼等の傀儡たらしめんと
するもの以外にない。(十頁)

かかる太平洋を圍む諸情勢の逼迫に——東亞に
於ける我が國の立場も急迫せる事態に直面すること
となつた。即ち支那に歐米諸國の対日壓迫、勢力の利
用——その經濟的支拂を得、またソ聯との接近を圖り、
かつ我が國力を過小に評價して日本與し易し、同胞
の血と肉とによつて確立せられに滿洲に於ける地位を蹂躪して
我が生命線と脅かすに至つた。かくて昭和六年九月、滿
洲事變の勃発を見たのである。(十一頁)

昭和十二年七月、萬寶溝橋に於ては日支衝突事件に際し
ては、我が國は東亞の安寧のため、現地解決、不擴方
針を以て堅持、隱忍自重し、彼の反省を待つたのである。然
るに支那は飽くまで我が實力を過小に評價し、背後の勢
力を恃むとして、遂に全面的衝突に至り導いた。かくて確證
は大陸の野を蔽ふ亞細亞にとって極めて悲しむべき事態が
展開せらるゝに至つたのであるが、事ここに至れば我國は事
變の徹底的解決を期し、新東亞建設の上に課せられ

嚴肅なる皇國の使命の達成に路邁進しなければならぬ。(二十五・二十六頁)

ここに我が國の東亞に於ける指導的地位は愈々不拔のものとなり、八紘を掩ひて宇となす我が肇國の精神こそ、世界の新秩序建設の基本理念たるべき、ことが益々明確になつたのである。(二十九頁)

即ち政治的には欧米の東洋侵略によつて殖民地化せられた大東亞共榮圈内の諸地方を助け、彼等の支配より脱却せしめ、経済的には欧米の搾取を根絶して、共存共榮の円滑なる自給自足經濟体制を確立し、文化的には欧米文化への追隨を改め、東洋文化を興隆し、正しく世界文化の創造に貢献しなければならぬ(三三頁)

世界新秩序の建設は、漸くその第一歩を踏み出したのみである。現状維持の自由主義的民主主義國家の群は、これに対して相結んで必死の妨害を試みてをり、まことに大業の前途はなほ遠であつて、その行路は決して坦々たるものではない。(三十二頁)

今次のドイツの目覚まし、活躍は、決して高度性能の機械化軍備の威力のみによるものではない。平時にあつてそれを支へ、それを動かしてゐる旺盛なる國民精神と國民の熱心なる國防への協力との賜なりである。(三十六頁)

而して我が國の總力戰体制強化の目的は、偏へに皇運を扶翼し奉るところになり、それは全國民がその分に応じて各々臣民の道を實踐することによつて達せられる。ソ聯は共產主義による世界制覇を目的とし、階級的獨裁による強權の行使を手段としゐる。ドイツは血と土の民族主義原理に立ち、アングロサクソンの世界支配、ドイツ壓迫の現状を打破し、民族生存權の主張に重點を置き、そのためにナチス黨の獨裁に対する國民の信頼と服従とを徹底せしめ、全体主義を採用してゐるのである。(三十二頁)

我が國は、皇祖天照大神が皇孫瓊瓊杵尊に神勅を授け、この豊葦原の瑞穂の國に降臨せしめ給ひしより、萬世一系の天皇、皇祖の神勅を奉じて永遠にしめしめ給ふ。臣民は億兆心を一にして忠孝の大道を履み、天業を翊養し奉る。萬古不易の我が國體はここに燦として耀いてゐる。(三十三頁)

皇國臣民は、果しくも皇室を宗家と仰いで、一國一家
の生活も營んでゐる。もとより我が國には古來他民族
の皇化を慕つて來たりはべるものがあるが、これ等
外來民族も御教威の下に感化し、臣民たるの恵澤に
浴し、時移るに従ひ精神的にも血統的にも全く一體と
なつて、臣民たるの分も竭くし來つた。聖徳無邊萬
物を包含同化して互らざるなく、一國一家の實は愈々
舉がり、君民一体の光輝ある國家は天壤と共に窮ま
りなく榮えて來た(四十二頁)

萬民愛撫の皇化の下に德化心を一にして天皇にまつ
ひ奉る、これ皇國臣民の本質である。天皇へ順順奉仁
するこの道が臣民の道である。かの「和を以て貴しとなす」
との御教へを以つて始まる聖徳太子の十七條憲法には(五十一頁)

耶：我が國に於いては思ふこそ孝をあり、思ふが大本であ
る。我等は一家に於いて父母の子とあり、親子相率ふて
臣民である。我等の家における孝は其のままに思ふに
ばなつた。思ふは不二本であり、これ我が國體の然ら
しむるところであつて、ここに他國に比類なき特色が存す
る。もとより我國に於いては、西洋に見る如く夫婦を
單位とせず親子関係を甲べとして家をなし、從つて
孝道が重んぜられるのは當然のことである。(五十六頁)

新時代の皇國臣民たるものは、皇國臣民としての修練も積まなければならぬ。即ち、國體の本義に徹し、皇國臣民たるの確固たる信念に生き、氣節を尚じ、鐵見を長じ、雄渾なる意志と旺盛なる體力とを鍊磨して、よく實踐力を養ひ、以つて皇國の歴史的使命の達成に通達すること。これ皇國臣民として積むべき修練である。(平井六郎)

歴代の天皇は皇祖の神裔でありせられ、皇祖と天皇とは御親子の關係にあはせられる。而して天皇と臣民との關係は、義は君臣にして情は父子である。神と君、君と臣とはまことに一體であり、そこに敬神崇祖、忠孝一本の道の根基である。(大十三郎)

皇國臣民としての修練は、また果敢斷行、勇往邁進する實踐力や養成に向けられねばならぬ。爲すべきは敢然としてこれを爲し、爲すべきやうやるは斷じてこれを爲さざる其の實踐力は、國體に基く深き信念によらねばならぬ。(大十三郎)

修練を重んずるは我が國古來の風であり、然が敬學の特色である。敬と學とが道に歸入するの機を修練または行といふ。武士道^一如きは特に年少の時より日夜鍊磨に鍊磨を重ねることによつてその神髓を發揮し得た。剣道・柔道・弓道といひ、茶道・華道・藝道といふ、何れも行を通じてその奥義に參入し得ることを示してゐる。佛敎にしても、我國に於いては鎮護國家の敎へとして受容し、忠孝のための行として國民生活の中に攝取した。

儒教に對しても同様な態度であつた。かかる態度は、
欧米の科學、技術を攝取するに當つても異なるべき
ではない。我等は新時代の皇國臣民として、重大なる
責務を深く身に體し、我等の父祖の先輩によく思ひを
致して、帝位生臥の間、臣民の道の修練に念々不斷
の精進を重ね、國家奉仕の實を擧げねばならぬ。(七十一
—七十二頁)

我等皇國臣民は、悠久なる故帝國の古より永遠
に皇運扶翼の大任を負ふものである。この身この心は
天皇に仕へまつるを以つて本分とする。我等の祖先も同
じ本分に生き、その生命を我等に傳へたのであつて、我等
の生命は我がものにして我がものにあらざらねばなら
ぬ。従つて我等の現實の生活はすべて嚴肅なる歴史
的のものであり、我等は國民たうことも以外に人たること
を得ず、更に公を別にいて私はないのである。我等
の生活はすべて天皇に歸一し奉り、國家に奉仕す
ることによつて眞實の生活となる。(七十一—七十二頁)

日常我等の私生活と呼ぶものも、畢竟これ臣民の
道の實践であり、天業を豐饒にし奉る臣民の營
む業として公の意義を有するものである。天雲の
向は伏す極み、谷稷の土渡る極み、自土にあらざる
なく、皇國臣民にあらざるはない。されば、私生活を

以つて國家に關係なく、自己の自由に屬する部面であると思ひ、私意を恣にするが如きことは許されないのである。(七十二頁)

我が國の家は、祖孫一体の連繫と家長中心の結合により成る。即ち親子關係を主とし、家長を中心とするものである。歐米諸國に於けるが如き夫婦中心の集合体とはその本質を異にする。従つて我が國の家に於いては、家長と家族、親と子、夫と妻、兄弟姉妹各々その分があり、整然たる秩序が存すると共に、七き祖先も在すが如くに祭られ、生まれ出づる子孫も將來の家族として家の永遠性の中に祖念せられ、ここに祖孫一体の實が興ずりしめる。更に我が國の家は國に繫着するもその本質とする。(七十二—七十三頁)

家の生活に於いて先づ強調せらるべきは、敬神崇祖の精神である。敬神崇祖は我々の生命の根源への随順であり、家も尊重する所以の基本であつて、敬神の精神を貫くものは神を通じて天皇に歸一し奉るところにある。(七十三—七十四頁)

敬神崇祖は報本反始の行であり、報本反始は報恩感謝の念を起さしめる。この報恩感謝の念があれば、人は個人主義や利己主義に陥ることはない。敬神崇祖を怠るにすると家庭にあつては、子弟の訓育に於いて魂を缺くのみならず、國民精神の滋養に於て全うと期し得べくもない。家庭の生活は、常に敬神崇祖の本来の精神に基づいて営まれることが必要である。(七十五頁)

我々の生活資料はすべて神より頂くものとして神に感謝し、従つてまた自然に對しても生産者に對しても感謝するものである。(七十九頁)

以上述べた如く、家は皇國臣民の修練の道場である。神を敬ひ祖を崇び家業に精勵する質素簡素なる生活の中に剛健にして情操豊かなる國民精神が鍊成せられ、よく皇運を扶翼し奉る皇國民が育成せられる。そこに自ら苦樂を共にする一家團圓樂の具の如き精神も宿るものである。(八十一頁)

元來我が國に於いては、職業は國家生活般の事を分擔して天皇に奉仕するつとめであり、それが後世子孫に傳へられたのである。時世の推移に伴ひ職業の形態は漸次變化したが我が國職業の根本義は、營利を主眼とせずして生産そのものと重んじ、勤勞そのものと尚ぶ

風習の中に保持せられ來たのである。(八十四頁)

自己の利益とならば法律を濫り他を犠牲に供
する事も教へし利益なくば他人の窮乏もよそに見
てみたり儲けのみを目指すといふ如きは決して職分
奉公とはいへ得ない。今日殊に中小の商工業者は非
常に困苦の中にあり、高面せられ我が國内外の事
情によく關心を致し積極的に商業を通じて真
のつとめに盡す。國家奉仕を全うせねばなら
ない。(八十九頁)

凡そ皇國臣民の道は如何なる職にあると論ぜず、
國民各々國家活動の如何なる部面を擔當するか
を明確に自覺し、自我功利の念を棄て國家
奉仕をつとめとして祖先の遺風を今の世に再現し
夫々の分を竭くすることと以てこれが實質踐の要諦とする。(八十九頁)

まこと支那事變こそは、我が隆盛國の理想を東亞に
布き、進んでこれを四海に普くせんとする聖業であり
一億國民の責務は實に盡くすべく一絲のものではない。
即ちよく皇國の使命を達成し、新秩序を確立する

1675-14

は 前途 なる 途 途 といふく 今後 更に 幾多の 障
碍に 遭遇 する こと あり 覺悟 せねば なら
ぬ (九十一頁)

RECEIVED 10 3004301
COB